

# 与謝野晶子童話『金魚のお使』論

—子どもの受容の視点から—

A Study on the Fairy Tale “Kingyo no Otsukai” by Akiko Yosano

山田 吉郎\*

Yoshiro YAMADA

## 序

歌人与謝野晶子が童話作家としての一面を有していることは知られているが、その晶子童話の中にあって最もすぐれた作として評価が高いのが『金魚のお使』である。この作品は現代文学の視点から見ても十分に新しく、童話作品としての枠を超えて豊かな文学性を有していると思われる。また、高部晴市によってすぐれた絵本としても上梓されている<sup>(注1)</sup>。本稿では、この『金魚のお使』が包摂する豊かな文学性に焦点を据え、それが読者に、なかんずく子どもたちの心にどのように受容されてゆくのか、その特質を明らかにしたいと考えている。

『金魚のお使』は、『少女世界』第2巻第8号（明治40年6月、博文館）に発表された。その後、明治43年9月に晶子の童話集『おとぎばなし少年少女』（博文館）に大幅な改稿を経て収録された。その改稿の実態についてはすでに古澤夕起子著『与謝野晶子童話の世界』（平成15年4月、嵯峨野書院）に詳しい分析があるが<sup>(注2)</sup>、本稿でも初出に目を配りながら、分析を進める予定である。（当然のことながら、前記古澤のすぐれた先行研究に教示を受けつつ進めてゆくことを明記しておきたい。）その上に立って、今回の考察では、高い完成度を示している『おとぎばなし少年少女』収録の本文を直接の対象とし、童話としての構造と特質を探究してゆく。

さて、『金魚のお使』は、三匹の金魚が電車に乗って駿河台の菊雄さんの所までお使いに行ってくる物語である。瀬田貞二『幼い子の文学』が提唱するような、典型的な行って帰る形式の物語であり<sup>(注3)</sup>、幼い子どもたちにおのずと親しみやすい物語構造を有している。そのほか晶子特有のいたわりに充ちた語りのやわらかさも印象的だが、何と言ってもこの作品が注目されるのは、金魚が電車に乗ってお使いにゆくという、荒唐無稽とも言いかねないような発想のユニークさである。もともと童話には現実離れた空想性が付与されているものだが、その空想が『金魚のお使』においては実に意表を衝いており、なおかつ美しく、味わいがあるのである。この独自の発想が、わが子に肌近く語りかけられるような晶子の柔らかな文体によって生かされてい

る。小稿では、こうした童話作品としての『金魚のお使』の構造と特質を仔細に分析してゆきたいと考えている。

## 1 不思議世界への導入

『金魚のお使』の最もすぐれた点は、言うまでもなく金魚が電車に乗ってお使いに行くという発想の卓抜さにあるわけだが、併せてこの奇妙に美しい童話世界に読者を引き込む冒頭部の構造に目を向けねばならないであろう。冒頭部を引く。なお、引用は『鉄幹晶子全集』<sup>(注4)</sup>収録の『おとぎばなし少年少女』による。原文は総ルビであるが、本稿では適宜必要と思われるもののみにルビをふることにする。

太郎さんは駿河台の菊雄さんの所へ、お使をやらなければならない御用があるのですが、女中の梅やが御病氣なので、どうしたらいいだろうかと考へて居ました。さうすると弟の二郎さんが、  
『兄さん、金魚をお使にやりませう。』  
と云ひました。太郎さんは喜びまして、  
『さうませう、赤をやりませう。』  
と云ひますと、  
『僕の白も一緒にやりませう。それから千代ちゃん<sup>ぶち</sup>の斑も一緒にやつていいでせう。』  
二郎さんのかう云つた言葉に千代ちゃんも賛成したものですから、三匹の金魚はいよいよお使に行くことになりました。

誰かを行事のためにお使いにやらなければならないが、いつも行く梅やが病氣なので困っているという、ごく日常的なできごとから語り出されている。ちょっと困ったことをどのように解決するかという場が物語の発端となる形式は童話においてはしばしば見られる。本作品においては、太郎、二郎、千代という三人の子どもがこの困った場に立ち合い考えるのだが、この時の提案が何と金魚をお使いにやることなのである。

ここでまず注目したいのは、この提案が二郎から出されたことである。兄の太郎はおそらくは生まじめに考え込んでいたであろうが、そんな兄に、「兄さん、金魚をお使に

\* 〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学短期大学部保育科

Department of Early Childhood Care and Education, Tsurumi University of Junior College, 2-1-3 Tsurumi, Tsurumi-Ku, Yokohama 230-8501, Japan.

やりませう。」と突拍子もない提案をするのは弟の二郎である。ここまでで、生まじめな兄の太郎と、次男坊として日頃からわりあい気軽に自由なふるまいをしているであろう弟の二郎の人物像が生き生きと浮かび上がってくる。そしておもしろいのは、そうした奇想天外な二郎の提案に、兄の太郎が喜んで、「さうませう、赤をやりませう。」と同意する点である。ここから物語はにわかに奇妙な雰囲気に引き込まれてゆくのであり、しっかり者に見える太郎にも奇妙な世界への移行を促す役割が与えられている。(なお、鈴木三重吉の名作童話『小熊』にも森の鳥の奇妙な提案を動物たちが何の疑いもなく受け入れるという同様の発想が見られる。)そして、さらにその金魚をお使いにやる提案がそばにいた千代(おそらくは妹であろうか)の賛成も得られたところからにわかに実現する運びとなるのである。いわば提案、支持、賛同というごく自然な人の輪のひろがりを得られているところに、この不思議世界への移行がスムーズに行われた要因が存したのであろう。加えて注目したいのは、太郎の赤、二郎の白、千代の斑<sup>ふち</sup>という金魚の色彩の鮮やかさである。ひらめくような金魚の色彩の美しさが一種の幻惑的な雰囲気を盛り上げ、読者に軽い陶酔感を与えているようにも思われる。

このように、金魚のお使いが子どもたちによって決定されると、次に間髪を入れず金魚たちの会話へと移行する場面転換の冴えが印象深い。

『電車に乗って行くのだつたね、赤さん。』

『さうだよ、危いから気を付けなくちやあ。』

『電車は恐いものだつてね、じつとつかまつてなくちやあ礫<sup>いし</sup>かれるのかしら。』

『さうぢやないだらう、乗る時が危いのだよ、それから降り<sup>おり</sup>時なんかね。』

赤は一番大きいものですから外<sup>ほか</sup>の二正<sup>ふたせい</sup>にこんなことを云ひ云ひ甲武線の電車の新宿の停車場へ来ました。

池から金魚を取り出す場面も飼い主の子どもたちと金魚の会話も省略され、いきなり駅へ向かってゆく金魚たちの会話へと転換する素早さ、巧みさは見事である。起承転結の起にあたるこの部分は無駄な描写が一切無く、相当の推敲がなされたことをうかがわせる。

ところで、すでに古澤夕起子著『与謝野晶子童話の世界』によって指摘されているように、この作品の初出と単行本収録作の間には相当の違いがある。

初出と単行本収録作を比べてすぐに気づくことは、登場する子どもの名前が異なっていることであろう。子どもたち三人とその飼っている金魚三匹が出てくるのは共通しているのだが、単行本収録作では太郎、二郎、千代とわりあい当時の一般的な名前が使用されているのに対し、初出では光、茂の兄弟と近所に住んでいる友達の太郎を加えた男の子三人が登場する。

晶子は『おとぎばなし少年少女』の「はしがき」で、わが子に読み聞かせるに適した童話の少ないことを嘆き、それならば自ら創作しようと思い立った旨を記しているが、初出の『金魚のお使』で実際に光、茂という晶子の子ども

の名(正確には次男の名は秀<sup>しげる</sup>)を出しているところには、そうした半ばプライベートな動機の反映が見られると言わなければならない。しかしながら、単行本に収録されるにあたって、太郎、二郎、千代といったごく一般的な子どもの名へ改められたところには、童話『金魚のお使』を一般読者へ向けて開こうとする意識が存していたのではなからうか。また、初出では男の子三人であった子どもたちについて、千代という女の子を新たに入れ替えたところにも、ほぼ同様の一般読者への配慮が見られると言ってよいのではなからうか。

冒頭場面の比較でもう一つ着目したいのは、初出で見られた説明的箇所がみごとに削られている点である。たとえば冒頭のお使いの内容も、「駿河台の有さんに遊びに来てほしいのですが」と初出で説明されている部分が削除され、金魚の斑<sup>まだら</sup>(単行本所収のテキストでは斑<sup>ふち</sup>となっている)が「ちゃんとおこしらへが出来て」やってくる場面も省略されている。きわめて簡潔に会話文の一つ一つが要所を占め、効果的な改稿がなされている。

## 2 駅でのやりとり

駅という存在は、子どもの興味をことに惹きつけ、想像力をうながすところがある。切符や改札、プラットホームなど子どもが目を輝かせて見入る物が並んでいる。宮沢賢治『銀河鉄道の夜』の駅や切符の描写などはその代表的なものであろう。童話『金魚のお使』でも、まず切符についてのエピソードが語られる。単行本収録作より引く。

赤は一番大きいものですから外<sup>ほか</sup>の二正<sup>ふたせい</sup>にこんなことを云ひ云ひ甲武線の電車の新宿の停車場へ来ました。

『切符を三枚下さい。』

出札口で赤が大きい声で云ひますと、

『貴君<sup>あなた</sup>は金魚さんぢやありませんか、金魚さんに切符は上げられません、お手がないから。』

と駅夫は云ひました。

『赤さん、乗れないのかい。』

白は心配さうに云ひました。

『つまらないなあ。』

斑<sup>ふち</sup>は独言を云つてます。

『駅夫さん、僕等は乗れないのですか。』

赤が聞いて見ますと、

『乗つても宜<sup>よろ</sup>しい。』

と駅夫さんは云ひました。三正は嬉しさうな顔をしてぶらつとほおむへ出て行きました。

赤、白、斑それぞれの性格がみごとに描き分けられた場面である。年長と思われる赤の控えめに礼儀正しさを感じさせながらもしっかりとした様子、白の心配性な性格、そして斑の「つまらないなあ。」とぼやくやや気ままな率直さなど、短い会話のやりとりの中で生き生きと印象づけられる。

なお、金魚と駅員とのやりとりは初出では、

赤は一ばん兄さんですから、札売口<sup>ふだうりぐち</sup>へまゐりまして、

『お茶の水の往復を三枚。』と云ひますと、駅夫がわらひまして、

『あなたは金魚ぢやありませんか、金魚には切符はいりません、手がないから。』

と云ひました。金魚はよろこんで石のだんだんを上つて行きますと、新宿の方から電車がまゐりました。

となっている。初出では赤と駅夫との会話に限定され、単行本所収作のような三匹の金魚の描き分けは見られず、この点では明らかに改作の効果が得られているであろう。とりわけ、単行本において斑が「つまらないなあ。」とつぶやく遊びの楽しさをもとめる子ども特有の感覚が描かれている点は印象深い。また、金魚たちに切符が発売できない理由である金魚に手がないということも、初出ではやや露骨な感があったが、単行本収録の際に「お手がないから。」と駅夫の言葉が丁寧体に改められることにより柔らかな調子になっている。このほか、古澤夕起子前掲書で指摘するように、無賃乗車的な初出のニュアンスを改めたこともたしかに首肯される点であろう。

このように、金魚たちは無事に改札を通してプラットホームに出てゆくことになるのであるが、読者の子どもたちは半ば不思議に思いながらも金魚が電車に乗るさまを思い浮かべようとする。だが、子どもの想像力をもってしても、いったい水の中に棲む金魚がどのように電車の中にいるのだろうと想像がむずかしくなりつつある場面ではあろう。手足をもつ人間や陸上動物と、胴体と鰭のみの魚類との違いは相当に大きいと言わざるをえない。考えてみれば、三匹の金魚が駅まで歩いてくるシーンにしても若干思い浮かべにくい内容ではある。金魚が着物を着て帯を締め、傘をついて切符売り場を見あげている初出誌『少女世界』の挿絵の奇妙さはそれを裏打ちしているであろう。

そのような物語の流れの中で、電車への乗車シーンで水のないことを訴える金魚たちの姿は、読者の子どもたちの心理にも適度の納得感を与えるものではなかろうか。その場面を単行本収録作より引く。

駅夫さんが左の手を伸して、右の手で持った笛を鳴らさうとしまして、

『びい。』

と吹きかけますと、三匹の金魚は大変<sup>あわ</sup>周章<sup>ちよいと</sup>でまして、

『車掌さん、車掌さん、一寸待つて下さい。』

『待つて下さい、駅夫さん、駅夫さん。』

『駅長さん、駅長さん。』

車掌さんも、駅夫さんも、駅長さんも何事が起つたのかと思つて金魚の<sup>そば</sup>傍へ走つて来ました。

『どうしたのです、どうしたのです。』

『怪我<sup>けが</sup>でもしたのですか、金魚さん。』

車掌さんと駅夫さんがかう云ひますと、

『水を入れて下さい、はやく水を入れて下さい。』

と金魚は声を揃へて云ひました。

水に棲む金魚たちが街や駅を平気で歩いていることに不思議さを感じていた読者の子どもたちも、金魚たちが水を欲していることを知り、謎解きをされたような思いを抱くであろう。幼児が非現実的な空想を受け入れやすいことは事実としても、そこにはおのずと限度があるであろう。『金

魚のお使』という物語を読み進める過程で、金魚たちが人間と同じく際限もなく水のない空气中を活動することへの違和感はおのずと頭をもたげてくると予想され、あたかもそれを先取りするかのように、作者晶子は金魚たちに自ら水を欲していることを訴えさせるのである。

さて、その金魚たちと駅夫や車掌、駅長たちとのやりとりは、そこはかとないユーモアもあり、本作の中でも生き生きとした場面であろう。水を入れてくれと懇願する金魚たちと駅員たちの、切実ながらも一種珍妙なやりとりは印象深い。「水を入れてください。」と訴える金魚たちに、駅員が困惑して「水を何処へ入れるのですか。」と聞くと、金魚たちは「電車へ水を入れて下さい。」という。その辺のやや風変わりなやりとりを次に見てゆこう。

金魚がさう云ふのを聞いて、車掌さんは首を振りまして、

『電車へ水は入れられません、そんなことをするとお客様の下駄や靴が濡れますから。』

と云ひました。

『それでも水を入れて貰はないと僕達は死ぬぢやありませんか。』

赤がかう云ひますと、白と斑は、

『苦しいなあ。』

『ああ苦しい、水がなくちゃあたまらない。』

こんなことを云つてました。車掌さんも駅夫さんもそれが気の毒なものですから、いろいろと考へて見ました。

『それではかうしやうぢやありませんか、駅長さんの所にある金盥<sup>かなだらひ</sup>を拝借して、あれに水を入れて来て上げます。』

駅夫さんはかう云つて<sup>あちら</sup>彼方へ行きましたが、暫くしますと大きな金盥に水を沢山入れて持つて来ました。

電車に水を入れて下さいと無理を言う金魚たちに、車掌が「電車へ水は入れられません、そんなことをするとお客様の下駄や靴が濡れますから。」と答える言葉は、金魚たちにとっては生死にかかわる重大な事柄ながら、下駄や靴が濡れるからというどこかのんびりとした日常的な受け答えであって、そのピントがややずれた対応が興味深い。金魚たちにとっては生死にかかわることであるので本来なら車掌の対応は不真面目な感も起こるのであるが、考えてみれば金魚たちは水のない中を駅まで歩いて来たのだという既成事実が、この場面をさほど深刻さを感じさせないものになっているのであろう。なお、この場面での車掌の対応は初出では駅夫が行い、その駅夫の言葉として、

『そんなことは出来ません、電車の中へ水を入れると人の足が皆ぬれるし、<sup>くつ</sup>履をぬいで上へあがつて、窓から外を見てる坊ちやんがたの履が水に浮くぢやありませんか。』

とより具体的な内容となっている。電車の中の子どもたちが靴を脱いで車窓の風景に見入っているさまを描いているのは、電車に乗った子どもたちの心のはずみを語りつつ、車内の様子を浮かび上がらせてそれなりに効果的な叙述だ



と思われるが、単行本収録の際には、「お客様の下駄や靴が濡れますから。」と簡潔な理由説明で済ませている。概して単行本収録作においては、初出時と比べて街や車内の様子は削られる傾向が指摘できるが、それは金魚たちと駅員とのやりとりに話を集中させるものであり、それはそれで一つの方針であったろう。童話『金魚のお使』を総体として眺めれば単行本収録作の方が完成度は高いと言えるであろうが、今述べた場面に関しては初出からの改稿をどう評価するかはむずかしいところであろう。

ともあれ、水を用意してもらった金魚たちは、口々に「ありがたう」とお礼を言う。「ちやぶん、ちやぶん、ちやぶんと三疋は金盥かなだらひの中へ飛び込みました。」と描かれ、無事電車に乗って出発してゆく。(ちなみに、この「ちやぶん、ちやぶん、ちやぶん」という効果的なオノマトペは初出にはない。)

### 3 トンネルのエピソード

先にも触れたように、幼い子どもたちにとって電車に乗ることは大きな楽しみの一つなのであるが、中でもトンネルをくぐる体験は、一瞬に訪れる闇と響きも相まって、子どもたちの感覚を刺激し、強い興味を抱かせるものである。それはまた、砂場遊びや積木遊びの中でのトンネル造りの面白さともつながりを持ち、幼い子どもたちの生活感と融け合うものである。童話『金魚のお使』においても、トンネルをくぐるという場面は大事なエピソードとして扱われているように思われる。

電車は新宿を出て、それから代々木だの千駄ヶ谷だの信濃町だのを通りまして、四谷のもとの学習院の下のとんねるへ入りました。急に電気燈がつきましてそこらが暗くなつたものですから、白と斑ふちは夜分になつたのだと思ひまして、

『ぐう、ぐう、ぐう。』

と鼾いびきをかいて寝てしまひました。とんねるを出てもまだなかなか目を覚さうでないものですから、赤は外の人に恥しいと思ひまして、

『白君、白君、おい斑さん、もうお起きよ。』

と云ひました。白と斑は一度に目を覚まして、

『おや、もう夜が明けたのかい。』

『坊つちやんお早う。』

寝呆ねぼけてこんなことを云つてます。

『君、此処はお家の池ぢやないよ、電車なんだよ、先刻暗くなつたのは夜分になつたのぢやなくて、あれはね、とんねると云つて土の中に電車の道が出来て居る所なんだよ。』

と赤が教えてやつたものですから、

『さうかねえ。』

『そんなことちつとも知らなかつた。』

と云つて二疋はうなづいてました。

ここでは、直接トンネルをくぐる面白さに触れてはおらず、トンネルの中で寝ている白と斑ののん気さと、それを周囲の眼を意識して恥ずかしく思う年長の赤の心理が描か

れている。三匹の金魚の描き分けには鮮やかなものがあるが、ただトンネルをくぐることの楽しさはあまり感じられず、その点はやや物足りない傾きもなくはないであろう。もっとも、やや足早に速度感をもって叙述するところに作者は重点を置いているとも考えられ、一概にこれをマイナスに捉えることはできないように思われる。なお、初出の描写と比較するとき、このトンネルの場面に関しては初出の方に生動感が見られるようである。初出の一部を引けば、  
赤『さつきね、くらくなつたらう、あの時は夜になつたのぢやなかつたのだよ、トンネルを知らないかい。』  
斑『トンネルつて坊ちやんが、つみ木でこしらへるものだらう。』

と子どもの積み木遊びに触れられ、さらに小さなトンネルをくぐった折り、四谷の学習院の下のトンネルと比べて斑に「あれは幼稚園の下だらう。」と軽口を言わせている。

このように初出に比べ単行本収録作ではトンネルのエピソードに関してはやや平板な叙述に終わっている傾きがなきにしもあらずだが、実はその直後に電車を降りたお茶の水の川のエピソードが接続しているのである。この川のエピソードは初出、単行本ともに存在するが、その位置が帰路(初出)から往路(単行本)へと変更されている。その内容には若干の加除はあるものの、いずれも金魚たちに遠足の楽しみを想像させる点で共通している。そして、単行本収録作においては、先述のようにトンネルのエピソード自体が淡々とつづられていたため、主人公の金魚たちを(ひいては読者の子どもたちを)喜ばせるエピソードを間を置かずすぐにつづけたのであらうと推察される。単行本収録作よりその部分を引く。

それからだんだんと、市ヶ谷だの牛込だの飯田町だの水道橋などを通つて電車はお茶の水の停車場すていしやんへつきました。

『赤さん、彼処あそこで人が身体を半分水へつけて何かをとつて居るが、あれは何なのだらう。』

白がかう云ひますと、

『あれはね、僕達の御馳走のぼうふらをとつて居るのですよ、金魚屋のお爺さんがよくくれたね、あれだよ、此の辺でとると見えるね。』

と赤は云ひました。

『景色は好い処だねえ。』

斑ふちはかう云ひました。

『またいつか坊つちやんにお願ひして此処こゝらへんへ遠足によこして貰はうぢやないか。』

白が云ひますと、

『その時はお弁当はいらないねえ、ぼうふらが居るから。』

と赤が云ひました。

ぼうふらに対するイメージを現代の子どもの読者がどう捉えるかは微妙なところであらうが、「僕達の御馳走のぼうふら」がとれる「景色の好い処」へと「遠足によこして貰はうぢやないか。」と金魚たちが言い合う場面は楽しいであり、遊びの要素が織り込まれている。トンネルの叙述

がわりあい淡々とすすめられているだけに、この川辺の叙述は印象をつよくしている。ただ、欲を言えば、「景色の好い処」だという具体的な描写がもう少し加わった方が鮮明になるであろう。

#### 4 お使いの完了と帰途の描写

さて、お茶の水駅で降りた金魚たちは、目的地である駿河台の菊雄さんの家に到着し、「太郎さんから聞いて来た御用」を無事に伝えることができた。いわばこの物語の目的達成の場面であり、本来ならば最も充実した叙述が見られてしかるべきなのだが、実はこの場面は意外に簡潔な叙述がなされているのである。何と言ってもこの物語では金魚たちがお使いをする用件の内容が明かされないままなのである。したがって、この用件を伝える場面は、用事そのものよりも、はるばる金魚たちがお使いにやって来たことへのねぎらいが主として描かれることになる。その場面を引く。

赤が太郎さんから聞いて来た御用を云ひますと、  
『それは御苦労さま、母様えらい金魚さんですね、三正で電車に乗つてお使いに來たのですよ。』  
菊雄さんは母様にかう云ひました。  
『それはえらいのね、御褒美を上げませう。』  
母様は三正の金魚に焼麩だの索麩だのを紙へ包んで下さいました。けれど、金魚は手が無いものですからおあづけて帰らうとしました。  
『それではあとから小包郵便で送つて上げませう。』  
『ありがたう、さよなら。』  
白と斑はだまつてお辞儀だけをして居ました。

この場面における金魚たちの動きは目立たず、むしろ他家を訪れたつつましさが見られる。それに対して、迎えた側の菊雄さんやその母の丁寧な対応ぶりが心に残る。とくに菊雄さんが「えらい金魚さんですね」と言い、母が「それはえらいのね」と応ずる「えらい」という形容が、この場面における眼目であろう。幼い子どもが一生懸命したことに対して報い自らの成長を自覚できる褒め言葉とも重なり、子どもの読者にとっては心を充たす終わり方なのではなかろうか。このように童話『金魚のお使』においては、金魚のお使いの到達点を描くにあたって、お使いの目的そのものよりも、金魚たちのお使いを果たした充足感の方に重きが置かれているのである。

なお、初出作品においては、金魚の赤が、「明日お遊びにお来し下さい、いろいろおもちゃが西洋からきましたから。」と言っているように、金魚のお使いの目的が語られた後、金魚たちを褒める描写がつづられている。このほか初出では、金魚たちが褒めをもらい帰ってゆくさまが描かれており、単行本収録作のように金魚たちは手がないから郵送してもらったという記述はない。たしかに金魚たちが電車に乗るとき手がないから云々と記されていたこととの照応が気にはなるが、辻褄を合わせようとした改稿がよかったかどうかは微妙なところであろう。

次に金魚たちの帰りの場面を見てゆく。

通常行つて帰る物語の場合、児童文学に限らず、目的地へ向かう場面の叙述に対して帰途の叙述は比較的短い傾向がある。昔話絵本の『ももたろう』や現代の『はじめてのおつかい』『こすずめのぼうけん』『ぐりとぐら』などもそうである。目的地に到達したことで読者の側に充足感が生まれ、その充足した味わいのままに物語を閉じたい欲求が根底にあるためと思われるが、童話『金魚のお使』においても帰途の叙述はごく短いものである。

三正はまたお茶の水の停車場へ来て、其処から金盥に入つてまた電車へ載せて貰ひました。今度は誰もとねるで眠つたりせずに新宿へ着きました。さうすると太郎さんと二郎さんと千代ちゃんとは停車場へ小さいばけつを一つづつ持つて金魚をお迎ひに來て居ました。

きわめて簡潔で、みごとな結末である。とくに最後の、太郎と二郎、千代の三人の子どもたちが「小さいばけつを一つづつ持つて」そろって金魚たちを出迎えるシーンは、この物語を読み終える子どもたちに言い知れぬ優しさと充足感を与えることであろう。ちょうど遠足から帰ってきた子どもたちを、子どもたちひとりひとりの親が集まって出迎えている生活場面を想像させる。なお、この結末について古澤夕起子論文で、「金魚に自分を重ねながら読み進んだ子どもたちは、少し成長した心とからだを安心してそのばけつの中に帰す。『ちやぶん、ちやぶん、ちやぶん』という音が聞こえてくるような結びである。」と捉えた言葉は、新鮮な感受性を通して本作品の魅力を浮きぼりにした白眉の評言であろう。

以上見てきたように、童話『金魚のお使』の終結部は、簡潔な帰途の描写と末尾の心こまやかな出迎えの叙述によって、みごとな収束を示していると言える。初出と単行本収録作では多少の異同はあるものの、ともに完成度には高いものがあると考えられる。

#### 5 幼年童話としての『金魚のお使』

与謝野晶子童話『金魚のお使』について、プロットに即しつつ考察を試みた。すでに論及したように、この作品には幼年童話としての基本要素である行つて帰る構想や適度な空想性などが見られるのであるが、ここであらためて注目しておきたいのは、当時の他の童話作家の作品と比べ、また晶子の他の童話作品と比べても、教訓性が稀薄なことである。金魚たちがお使いに行くというエピソードは、当然のことながら子どもたちがお使いに行くことの寓意をはらんでいる。その意味では物語自体の枠としては教訓性を揺曳させているとも取れるのだが、実はそのお使いに行く者たちを犬や猫、狐などではなく奇想天外な金魚としたところに、この作品が教訓性から解放されるゆえんがあったと言えるであろう。金魚は水棲であり、その金魚が自分たちと同じように街を歩き電車に乗ること自体が意表を衝いており、読者の子どもたちはその奇抜さ、おもしろさに心をとらわれ、その心のはずみのままに充足感をもって読み終わると推測される。子どもたちには物語の楽しさ、おもしろさがまず第一に実感されるのであり、物語中にいく

つかの教訓的な事柄があっても、読者の子どもたちは少なくともその教訓的要素に<sup>お</sup>押しつけられる感じをもつことはないと考えられる。しかしながら、物語の読後、奇想天外な物語を読んだ興奮がしだいに静まってゆく中で、金魚たちの電車内での様子やお使いに行った家のできごとなどが思い浮かび、おのずと金魚たちのふるまいを自分たち子どものふるまいと重ね合わせる形で反芻してゆくことと思われる。そしてその折りには、電車の乗り降りについて「危いから気を付けなくちやあ。」と言いつつ金魚たちの会話や、電車の中でいびきをかいて寝入っている白と斑を「<sup>はか</sup>外の人に恥しい」と思う赤の心情、さらにお使い先の家での金魚たちの礼儀正しさなどがあらためて思い返されてくるのである。それは間接的には社会教育的な内容を含んでいるのであるが、本作品においてはあくまでも奇想天外な物語のおもしろさ、楽しさに満足した後に思い返されてくるものであろう。いわば、童話『金魚のお使』の受容構造において、読者に届く印象に時間差があり、一種の複合的なモチーフを形成していると言えるであろう。

また、子どもたちの読後の充足感と関連して見落としてはならぬことに、金魚たちの行動に興味津々に眺める子どもたちの視線がある。金魚は金魚鉢や水槽、池などを通して眺められる鑑賞動物であり、金魚たちの物語を読み進める子どもたちにはおのずと金魚を間近で物珍しげに眺める密着したまなざしが具えられていることであろう。そんな子どもたちの視線がこの物語の背後には常に感じられ、そのことがこの金魚の物語に言い知れぬ愛おしさの情を付与していることを見逃してはならないと思われる。つまり、犬や猫、狐などの動物を擬人化して登場させるのと比べ、より密着した視線と愛おしみを注ぐようなおもむきがあり、それは本来水の中でしか生きられない金魚が陸上を歩く、しかも半ば飼主の子どもたちの依頼（つよく言えば指令）

によって陸を歩かねばならない危うさも相まって、よりいっそうの愛しさを読者の内に呼び起こすと考えられるのである。

さらに着目しておきたいのは、作品の終結部で駅に帰ってきた金魚たちを、

太郎さんと二郎さんと千代ちゃん<sup>すていしよん</sup>は停車場へ小さいばけつを一つづつ持つて金魚をお迎ひに来て居ました。

という叙述の優しさである。この叙述は、金魚を出迎える子どもたちの心優しさをあらわすだけでなく、本来棲んでいる水中とは異なり陸上を不安定に行って帰ってきた金魚たちに心を寄り添わせてきた読者の子どもたちに、言い知れぬ安堵感を与えるものであろう。金魚たちのお使いのありさまをつぶさに見ているのは、飼主の太郎、二郎、千代たちではなく、むしろ読者の子どもたちなのである。そうした読者の子どもたちの心を離さずにおく物語構造と力がこの作品には秘められていると言えるであろう。

与謝野晶子童話『金魚のお使』は、見てきたように幼年童話としての基本要素を備えながら、なおかつ斬新な発想によって現在でも鮮烈な印象を放つ作品である。晶子童話の傑作の一つであるとともに、明治期のお伽噺（童話）の中でも、その完成度の高さと発想の卓越性においてモニュメンタルな位置を占めると考えられる。

## 注

- (1) 絵本『きんぎょのおつかい』（高部晴市絵、平成6年4月、架空社）
- (2) 古澤夕起子『与謝野晶子童話の世界』（平成15年4月、嵯峨野書院）55頁～61頁参照。
- (3) 瀬田貞二『幼い子の文学』（昭和55年1月、中公新書）が提唱した「行って帰る」構想は、広く幼年文学の基本的要素として定着している。
- (4) 『鉄幹晶子全集』第5巻（平成15年6月、勉誠出版）参照。